平成30年度 復興庁クラウドファンディング支援事業事例集

復興庁
Reconstruction Agency
新たなステージ　復興・創生へ

みんなで実現！おもしろアイディア18選

2018-2019

なりわいをむすぶ
復興庁 企業連携推進室

令和元年９月

はじめに

2011年3月11日。東日本を襲った未曾有の大地震から8年が過ぎました。被災地では今も復興に向けて、様々な新しい取り組みが生まれています。

復興庁は、平成30年度より、被災事業者の資金調達手段を多様化するため、「復興庁クラウドファンディング支援事業」(被災地企業の資金調達等支援事業)を開始しました。

約半年余りの公募を経て、2019年3月現在、多種多様なプロジェクトが立ち上がりました。

新たな特産品の開発、地域を活性化させるイベントの開催、ソーシャルビジネスの立ち上げ、子どもたちに夢を与えるプロジェクト等々。

これらは、どれも被災地に希望の光を灯そうと活動する復興の担い手と、その活動を応援する全国の支援者がみんなで実現するユニークで創意工夫にあふれたプロジェクトの数々です。

本冊子でご紹介できる事例は、全体のほんの一部ですが、これからクラウドファンディングを実施してみようと考えている皆様の参考となれば幸いです。

目次

はじめに …… 01

目次 …… 02

活動概要 …… 03

Column 1　審査委員メッセージ …… 05

Column 2　クラウドファンディングが持つ可能性 …… 07

Column 3　魅力あるプロジェクトの作り方 …… 09

おもしろアイデア18選

1 PICK UP 三陸聖地化委員会 [岩手県 大槌町] …… 11
2 PICK UP 一般社団法人はまのね [宮城県 石巻市] …… 17
3 PICK UP 山猿選手権実行委員会 [福島県 郡山市] …… 23
4 釜石市総務企画部オープンシティ推進室 [岩手県 釜石市] …… 29
5 合同会社 sofo [岩手県 釜石市] …… 30
6 株式会社三浦商店 [岩手県 洋野町] …… 31
7 白石集落農業生産組合 [岩手県 山田町] …… 32
8 特定非営利活動法人メディアージ [宮城県 仙台市] …… 33
9 一般社団法人フィッシャーマン・ジャパン [宮城県 石巻市] …… 34
10 一般社団法人歓迎プロデュース [宮城県 気仙沼市] …… 35
11 有限会社栄泉堂 [宮城県 丸森町] …… 36
12 一般社団法人福島ブースター [福島県 福島市] …… 37
13 日本けん玉協会 福島県支部 [福島県 いわき市] …… 38
14 特定非営利活動法人富岡町 3.11 を語る会 [福島県 郡山市] …… 39
15 株式会社山燕庵 [福島県 鮫川村] …… 40
16 株式会社田村市常葉振興公社 [福島県 田村市] …… 41
17 SummitSpace PALLET [福島県 白河市] …… 42
18 一般社団法人ふるさとと心を守る友の会 [福島県 いわき市] …… 43

Appendix 1　クラウドファンディング支援事業採択案件一覧 …… 45

Appendix 2　クラウドファンディング支援事業採択事業者マップ …… 52

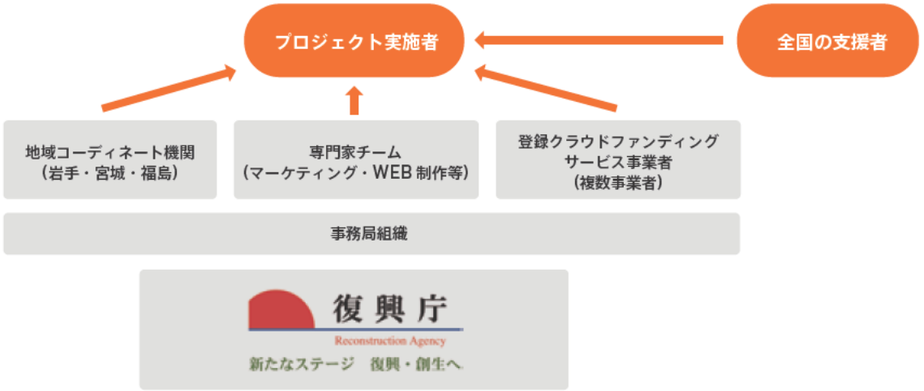
Appendix 3　平成30年度復興庁クラウドファンディング支援事業実績 …… 55

活動概要

クラウドファンディングを活用した資金調達のノウハウをお伝えし、東日本大震災からの復興を盛り上げたいという方への支援を行ってきました。基本的なポイントやコツからPRのやり方まで、クラウドファンディングのことはまったくわからないという方でもスタートできるように、ゼロからサポートいたしました。

事業体制

地域の枠、業種の枠、官民の枠を超え、様々な団体が協力してサポート体制を作りました。岩手・宮城・福島に設置した現地サポートを行う地域コーディネート機関は手厚いサポートを、各分野の専門家は支援者に訴えるためのノウハウや素材の提供を行いました。そしてそれらを登録クラウドファンディングサービス事業者が提供するWEBサイトを通じて、全国の応援者へ向けて発信していきました。



地域コーディネート機関	岩手県商工会連合会　ISHINOMAKI 2.0　MAKOTO　公益財団法人みやぎ産業振興機構　f life　Helvetica Design inc.
専門家	様々な分野から80名を超える専門家が登録
登録クラウドファンディングサービス事業者	CAMPFIRE　Readyfor　フレフレ　Makuake　Sony Bank GATE　NEXT RENOVATION　ふるさとチョイス　KICKSTARTER　FAAVO　未来ショッピング　MOTION GALLERY　MOTTAINAI もっと　いしわり　Crowd Realty　セキリテ
事務局組織	RCF Revalue as Coordinator for the future !

説明会

岩手・宮城・福島の各地で、30回を超す説明会を開催しました。クラウドファンディングとはどのようなものか、成功させるためのポイントや、本事業のサポート内容等をご説明しました。ご参加の皆様は、熱心に耳を傾けてくださり、ここから沢山の新しいチャレンジが生まれていきました。

	岩手県内	宮城県内	福島県内
開催期間	2018年 10月 9日～11月21日	2018年 9月 20日～11月20日	2018年 9月 9日～11月23日
開催回数	9回	12回	10回

Column 1 審査委員メッセージ

本事業では外部審査委員会を設置し、エントリー審査を実施いただきました。
被災地で生まれた新しいチャレンジの数々を見つめてきた4名の審査員よりメッセージをお届けします。

クラウドファンディング支援事業の意義

福島大学 経済経営学類
国際地域経済専攻 教授
吉高神 明

東日本大震災からの被災地の復興にとって、地域産業の支援は不可欠である。現地で活動する企業、NPO、個人等は自立的な資金調達を実現する上で、今も多くの困難に直面しています。そのため、広範囲かつ地域に根ざした支援体制を構築することが急務となっているところです。地元で活動する多くの事業者たちの「アイディア」や「情熱」と、被災地の復興を願う応援者たちの「善意」をクラウドファンディングでつなぐ本事業が、被災地の復興に資することを確信しています。

地域へ与えたインパクト

跡見学園女子大学
マネジメント学部
マネジメント学科 准教授
許 伸江

被災地の人々、特に高齢者や子ども、育児中の母親等の「困った」を解決するソーシャルビジネス要素の強い事業案が多く出されました。地域の農産物や人材等の既存資源、または休眠資源を活用したプランでは、被災地に立地しない事業者が被災地の事業者と連携して課題解決をしようとする案もありました。雇用創出が大切なのはもちろんのこと、場の提供による地域コミュニティの形成が実現、そこから地域内外の交流が深まり、広がりを見せることこそが重要です。

新たな資金獲得の手法で得られるもの

株式会社日本政策投資銀行
東北支店 次長 兼
東北復興・成長サポート室 課長
門田 敦嗣

金融機関や投資家からの事業資金調達は、リターンとしてキャッシュが求められるため一定の事業収益性を追求する必要がありますが、新たな資金調達手法であるクラウドファンディングは、事業者自らがキャッシュに限らず実現可能なリターンを設定しリスクの抑制が可能であるとともに、事業PRやマーケティングへの活用により顧客や支援者を獲得する効果が期待できます。

新たな資金調達手法が事業リスク低減や顧客・支援者獲得に活用されて新たな挑戦の呼び水となり、被災地の活性化につながる多くの取り組みが事業化されることを期待しています。

審査した所感・東北の今

一般社団法人東北経済連合会
副調査役
宮﨑 健治

震災から8年となった今も被災地が直面している課題に、正面から取り組もうとする多様な事業アイディアが寄せられたと思います。テーマとしては、風評の払拭に向けた交流人口の拡大策や、被災地企業が手掛ける地域産品の高付加価値化に関する内容が目立ちました。とりわけ、交流拠点の形成や観光資源のブラッシュアップ、シンボリックな製品開発といった面で関心の高さが窺えました。応募に際しては、可能な限り、実現性・継続性を意識したプランを練ることができれば、スピーディーかつ効果的な支援実施につながり、資金調達の確度が高まると思われます。

Column 2 クラウドファンディングが持つ可能性

個人がつながり支え合う社会へ

READYFOR株式会社 クラウドファンディング事業部マネージャー 地方創生責任者
富澤 由佳

日本での始まりと東日本大震災

クラウドファンディング（以下、CF）は、インターネットを通じて個人から資金を集める仕組み。日本で初めてReadyforがサービスを開始したのは2011年3月です。同時期に東日本大震災が起きました。

発災直後は事態のあまりの深刻さに、CFを活用することへの葛藤がありました。ところが同年5月、宮城県の大学生が「被災地の現状をなんとかしたい」と訪ねてこられ、「それならぜひ一緒に」と復興支援のプロジェクトのサポートを始めたのです。

被災地から直接発信されるメッセージは、多くの人の心を動かしました。気持ちをお金という形で集めるのシステムが、急速に広まるきっかけにもなりました。

現在も東北の案件は多く扱います。当初の「震災による被害から立ち上がるために」というものから、よりポジティブで創造的なプロジェクトが増え、フェーズが変わってきていることを感じます。

共感し、応援し、輪が広がる

CFは個人が個人を支える仕組みです。集めるのは資金ですが、同時に仲間を作ることができるのが大きな特長。「なぜやるのか」「どんな社会にしたいのか」を掘り下げて伝えることで共感者が集まります。本質的な部分に共感した人とは、その場限りでなく長期的な関係に発展する、これがCFの価値です。

個の時代といわれ、フリーランスで働く人も増えていますが、それでも人は一人では生きられずコミュニティを求めます。だからこそ、誰かの「やりたい」に共感し、応援することで個人同士がつながり輪を広げる仕組みは、今の社会になじみました。

スマホなどインターネット端末の普及も、後押ししたと思います。今では地方でも大都会と同じように発信でき、全国どこでも個人が動きを起こすことができます。

個人から巨大組織まで活用できる仕組み

自分のやりたいことを実現されるためにお金が必要だが、銀行からの融資が受けられない人が、CFという資金調達の手段を選べるように全国の金融機関約70行と提携をしています。

一方で、大学や研究機関、自治体といった組織もCFを活用しはじめています。国の補助金に頼っていた事業も、民間の個人から資金を集められるようになれば、地域社会の可能性は大きく広がります。大手企業と提携し、社会性の高いプロジェクトを実施する団体に対して企業のCSR資金をマッチングさせる「マッチングギフトプログラム」も提供しています。CFは、個人でも大規模な組織でも同じように使える画期的なシステムと言えます。

また、Readyforの「フルサポートプラン」では、資金を募る実行者に対して、キュレーターと呼ばれる担当者がつき、誰もがクラウドファンディングに挑戦できるようにサポートしています。「プロジェクトページの構成」「リターンの設計」「プロジェクト公開後のSNSでの発信」などを中心にサポートする体制をとっており、目標金額に到達するプロジェクトの割合が75%（直近1年間）と、国内最高水準の達成率を誇っています。

「想い」乗せたお金の流れを作る

「誰もがやりたいことを実現できる世の中をつくる」。Readyforのビジョンですが、これがCFの本質だと考えています。社会の課題解決や地域活性化に直結するプロジェクトでなくてもいいのです。一人一人がやりたいことを実現し、生きがいを感じることが、結果的に地域を活気づけます。地元では当たり前のことが実は他にない魅力だったり、なんでもないように思える技術が貴重なスキルだったり……まだ埋もれている価値を発掘し発信できるのも、CFならでは。

支援者は、発信されるプロジェクトに関心を持つことで社会の課題を知ります。自分が直接動けなくても、活動の力になったり夢を叶える応援ができたりする。想いと想いの橋渡しも、重要な役目です。

CFは、Readyforのミッションでもある「想いの乗ったお金の流れを増やす」システム。いまや、莫大な資金と豊富な人脈を持つ人だけが何かを実現できるのではなく、地域にいる個人が思いを叶えられる社会が生まれつつあります。

まとめ

- インターネットを使って、個人から資金を集めることができる。
- 融資や補助金に代わる、新しい資金の調達手段として期待。
- 「資金」だけではなく、想いを共感する「仲間」も集めることができる。
- 地域にいる個人でも、「やりたいこと」を実現することができる。

クラウドファンディングに「失敗」はありません

株式会社CAMPFIRE ソーシャルグッド事業部 マネージャー
酒向 萌実

お金を集めるだけのツールではない

クラウドファンディング（以下、CF）は、お金を集めるためだけのツールではありません。自分のやりたいことや団体、会社のPRに大変有効です。これほど大勢の人に自分たちを知ってもらう方法は、他にあまりないでしょう。例えば目標金額100万円のプロジェクトに200人が支援してくれるとすると、その後ろには何倍、何十倍もの「プロジェクトを知った人」がいます。だからこそ、上手に活用してもらいたいです。

PR効果を生かした事例では、宮城県の東日本大震災の集団移転地近くで、図書館を作ったプロジェクトがあります。古い農業倉庫を自分たちでリノベーションしたのですが、進捗状況を発信しながら「一緒にやりませんか」と呼びかけたのです。それによって全国からお金が集まる以外に、地域の人が連日手伝いに訪れ、地域に開かれた施設として親しまれました。CFがコミュニケーションのツールとして機能した実例です。

最近では、企業が新商品や新規事業で起案するケースも増えてきました。支援者と直接やり取りもでき、反応がダイレクトに分かる特性を生かして、テストマーケティング的に活用されています。

目標金額や期間、どう設定するか

起案する際は、目標金額と期間、リターン品を設定します。

目標金額の考え方は2通りあります。一つは見積もりを立て必要金額を出す方法。「何に使うのか」は支援者の関心も高いので、しっかり説明する必要があります。もう一つは、集められる現実的な金額を想定する方法。目安は、直接お願いしたりメールやSNSを使ったりして、自力で集められる金額の3倍です。実際に多くのケースで、直接つながれる人から受ける支援金額が全体の約3分の1を占めます。

リターン品は支援者へのお返し。支援額の3割程度が目安ですが、「お礼メール」「手紙」といった原価のかからないものも必ず設定を。純粋に支えたい気持ちで支援してくれる人も意外に多くいます。仲間になってつながりたいと思う支援者も多いので、イベントで本人に会えるなど参加型の「コト」をリターン品にするのも喜ばれます。支援額の設定は、最低金額をあまり下げず3000円または5000円程度がおすすめ。心情的に一番安い金額かその次を選びやすいからです。

プロジェクト期間は弊社の場合最大80日で、最低でも1カ月半～2カ月は続けることを勧めています。支援は直接応援してくれる人から同心円状に広がりますが、情報の拡散にある程度期間が必要です。

成功のカギは事前準備

プロジェクトを成功に導くには、事前準備がもっとも重要です。大きく2つあり、一つはコンテンツ作り、もう一つは期間中の発信プランです。

「魅力的なコンテンツにしなくては！」とつい気負いがちですが、初めからきれいに作ろうとしないほうがうまくいきます。まずは「思い」をすべて書き出しましょう。このお金を使って何をしたいのか、これまでのことや現状、描く未来など、どんどん書く。この段階で面白さや魅力は気にしません。全部出し切れば、その中に必ず核となるキーワードが見えてきます。ここから「どう見せるか」を考えていきます。

次に、発信のしかたを練ります。期間中、盛り上がるのは最初と最後のそれぞれ5日間。中間の停滞期にはSNS等で絶えず発信する以外に、イベントを開いたりチラシを配ったりと工夫が必要です。自分の支援者はどういう人でどこにいるのか、どうすれば情報が届くかを、準備段階で見極めておきましょう。初めての人でも、運営会社がサポートします。パートナーとなる運営会社は、ぜひ自分に合うところを選びましょう。

CFに「失敗」はありません。踏み出した時点で前進しているからです。やりたいことを発信し、自力では不可能な数の人に知ってもらい、経験値もアップ。誰にでもチャレンジできる夢への一歩、踏み出してみませんか。

まとめ

- 目標金額は、「自力で集められる金額の3倍」が目安。
- リターン品は、「支援額の3割程度」が目安。
- 募集期間は最低でも1カ月半～ 2カ月は設定する。
- CFサイトでは、思ったことを全て伝えられるようにする。
- CFに失敗は無し。まずは、チャレンジ。

PICKUP 1

クラウドファンディングがつなげる、魅力あふれるアニメの「聖地」。若者が行き交う大槌町。

三陸聖地化委員会　［ 岩手県 大槌町 ］

岩手県沿岸のほぼ中央に位置する大槌町は、山海の幸に恵まれ、水産業を主な産業とする町である。東日本大震災直後の津波により沿岸エリアは壊滅的被害を受けた。新たなまちづくりを手掛けるが、震災以前から若い世代の人口流出・過疎化という課題を抱えていた。そこで平舘豊さんは「大槌のまちに、多くの若者を呼び込みたい」と、「三陸聖地化委員会」を立ち上げイベントを計画。資金調達のためクラウドファンディング（以下、CF）公開へ踏み出した。

CFで資金調達と情報拡散を図る。イケメン鉄道ダンシキャラが、まちの救世主に。

「大槌町をアニメの『聖地』へ」、それが三陸聖地化委員会を立ち上げた理由だった。世界中の若者が集まるアニメの舞台「聖地」。大槌町から新たなアニメ文化を発信し、聖地化してコンテンツツーリズム（舞台になった場所を巡礼する）の波をつくり、交流人口を増やそうというアイディアである。

大槌町役場職員であった平舘さんは、震災後に職を辞し、IT企業を設立する。「三陸エリアは若者の受け皿が少ない地域です。IT産業は若者にとって魅力ある職種なので、その環境を整えようと考えました」。しかし、現実には他地域から人を呼び込み、移住・定住につなげることは、ハードルが高いことを知る。

一方、岩手県沿岸部を運行していた三陸鉄道は、釜石市から宮古市までの区間が津波により被災。再開に向け工事を進める中、復旧復興へ向けたシンボルとして2人の「鉄道ダンシ」キャラクターを誕生させ、声は著名な声優に依頼した。しかし、キャラクターは震災から7年近く、十分に活用されていない状況にあった。

これに平舘さんは、新たなまちづくりのヒントを得る。幼い頃からアニメや特撮ものが好きだったこともあり、世界に誇る日本文化の「アニメ」を大槌町から発信しようと構想する。賛同してくれたのは大槌町の仲間、宮古市・釜石市・岩手県職員の有志や、復興支援で大槌に滞在する人、震災をきっかけにU・Iターンした人である。

集まった仲間は、三陸鉄道ダンシキャラクターの周知と、被災地の現状を世界に届けるため、「三陸コネクトフェスティバル」開催へ動き出した。しかし、大型のイベントを開催するためには、多額の資金が必要だった。以前、CF運営に関わった経験のある平舘さんは「イベントの広報と資金調達をできるシステムは、CFだと確信していました」という。

議長
平舘 豊

初めてCFを経験した「フェスティバル2018」。聖地・大槌を世界へ発信。大槌史上初の一大イベント成功へ。

フェスティバル2018の成功の鍵になった人物が、芸能プロダクション代表・元アニメソング歌手の佐藤ひろ美さんである。「大槌町出身のひろ美さんに、東京で行っているイベントを、大槌で開催できないかと相談しました」。

課題は資金繰りだった。携わった経験が多少あるとはいえ、CF運営に不安のあった平舘さん。CF企業を紹介してもらったものの、イベント資金はもとよりCF企業への発注資金さえもままならない状態であった。試行錯誤するが、2018年2月開催のイベント予定日は刻々と近づいていた。

そんなある日、メンバーの1人から朗報が入る。「復興庁の平成29年度専門家派遣集中支援事業の支援対象になるのでは」という話だった。早速2017年10月半ばにエントリーし、採択された。「ようやくCF企業とつながったのは、開催日からさかのぼれば、ギリギリのタイミングでした」と当時を振り返る。また、紹介されたCF企業は、偶然にも以前紹介された事業者だったことで、公開へ向け歯車は勢いよく動きだした。

地域住民へ、アニメの聖地化を周知することにも力を注いだ平舘さん。2018年2月。初の「三陸コネクトフェスティバル」は、岩手県の小さな港町・大槌町に、全国から2000人もの集客を得た。参加者の多くはアニメを愛する若者で、沖縄から訪れた支援者もいたという。「大槌町史上初めての大きなイベントになりました。町役場も住民の皆さんにも、とても喜んでいただけました」。

復興庁クラウドファンディング支援事業を活用した2回目「フェスティバル2019」では、公開から目標額達成まで、3日の快挙。

2018年の同イベント終了は同時に、平舘さん

クラウドファンディング情報

CF開始 2018/12/23
目標達成日 2018/12/26
CF終了 2019/1/30

目標金額300万円 ★ 3日

調達金額……4,220,310円（141%）
支援者数……317人

CFサービス事業者　CAMPFIRE
CFサイト　https://camp-fire.jp/projects/view/101302

と聖地化委員会メンバーの「2019年」へ向けたスタートになり、新たに復興庁クラウドファンディング支援事業にエントリーし、専門家の支援を受ける。

２回目「2019」開催へ向けたCF公開では、直後から多くの支援を受け、公開から３日間という驚異的な早さで、目標額の140％を達成。支援者へのリターンの一つ、フェス１日目・２日目それぞれと両日の入場優先権付き「VIP席入場券と特製リストバンド」には、優先トイレ使用権や休憩所使用権も付帯。「三陸ダンシギフト」も人気を博した。三陸の夜を堪能する「佐藤ひろ美さん主催のコースチケット」、産地から直送する岩手牛や豚しゃぶセットを詰めた「山の幸ギフト」や大槌荒巻鮭・旬の一夜干しの「海の幸ギフト」などの地域の特産品リターンも支援者に喜ばれた。支援者全員にお礼状を送った平舘さんは「前回イベントの支援者に、イベント終了直後から細やかなコンタクトをとってきたことも、大きな成果につながったと感じています」と話す。

初回は、アニメ関連タレントの起用で、CF支援者やイベント集客を図った。２回目となった今年は、被災した三陸鉄道が３月23日に全線開通。それを祝うイベントとしてフェスティバルは30日、31日に開催された。「今回はタレントさんのお力をお借りすることなく、既存の鉄道ダンシキャラクター２人と、新たに私たちが考案した鉄道ダンシキャラクター１人、そして三陸の山海の魅力を発信する企画です。前年度の復興セレモニーでは、地域の被災状況をお話しましたが、今年度は復興へ向かう新しい大槌町、三陸の現状を知っていただきました」。

ところで、CFを利用する際、世話役のような立場で利用者に寄り添ってくれるのがキュレーターだ。平舘さんは「何も分からない私たちを、丁寧に、時に厳しく導いていただきました。多くの教えを学んだと思っています」と話してくれた。

事業者情報

三陸聖地化委員会

所在地　岩手県上閉伊郡大槌町大ケロ
設　立　2017年
議　長　平舘 豊
メンバー　15人
W E B　https://3riku-connect.jp

PICKUP 2

資金調達の切り札だった クラウドファンディング参加。故郷を救うため、命と真剣に向き合う。

一般社団法人 はまのね　［ 宮城県 石巻市 ］

宮城県沿岸北部にせり出す「牡鹿半島」は以前から野生の鹿が多く生息する地域で、人間と鹿が共存し、コバルトブルーの海と森林が織りなす豊かな自然を誇っていた。しかし近年、鹿の繁殖急増に伴う自然荒廃と人里での被害が拡大し、内陸まで及んでいる。半島の小さな漁村蛤浜（はまぐりはま）に住む亀山貴一さんは厳しい現状を周知し、打開策を構築するための資金調達をクラウドファンディング（以下、CF）に求めた。

自然と共存する故郷に 美しい緑とにぎわいを再び。

東日本大震災の津波で蛤浜は壊滅的な被害を受け、震災前９世帯あった集落は３世帯となった。「蛤浜に残っていた人のためにも、自分に何かできないか」とひとりで立ち上げた「蛤浜再生プロジェクト」。カヌー、SUP（スタンドアップパドルサーフィン）を通じた自然体験や林業・狩猟の６次化などの事業を展開し、３世帯７人の集落に年間１万５千人の交流人口を呼び込んでいる。

その拠点となる「cafeはまぐり堂」では、地場の野菜、自ら獲った魚など、地域の素材をふんだんに使ったメニューを提供する。地元産のジビエを探していた亀山さんは、石巻市内で鹿肉を販売する猟友会会長と出会った。

会長と会話を重ねる中、急増する鹿の被害の大きさと猟師の高齢化問題を知った。そこで、亀山さんと仲間は、狩猟免許を取得し、鹿の駆除に参加。その際年間1000頭ほど捕獲される鹿のほとんどが利用されず土中に埋められるという現実を目の当たりにした。

鹿解体処理施設の不足と鹿肉の流通がシステム化されていないことを知った亀山さんは、解体処理施設「はまぐりジビエ」の建設に動き出す。「人間が鹿と共存するために、ある程度の駆除は必要でした。それだからこそ、その命を最後まで活かしたかったのです」。

建設にかかる費用は、600～700万円。亀山さんは、助成金を活用して費用を捻出しようと行動に出た。八方手を尽くすが、農業でも林業でもない鹿の解体処理に対して、施設建設に活用できる公的な助成金はなかなか見つからなかった。そして、いつしか３～４年の月日が経過した。

ようやく2018年、地球環境基金から180万円、JCBから150万の助成を受けたが、必要な建設費

代表理事
亀山 貴一

用には程遠かった。

CFで故郷再生への想いを発信。

「CFへの参加は、資金調達のための最後の一手でした」と亀山さん。金融機関からの融資も考えたが、事業展開の不確実さを思えば、借金返済にかかる負担が大きいと判断したという。かつてCFに挑戦した経験があったことも後押しとなった。その時は、目標金額達成には至らなかったが、過去の経験を今回に活かすべく準備を進めた。

CFを成功させるためには、いかに多くの支援者の共感を集められるかにかかっている。そのカギを握るのが、支援者に向けたストーリー性のあるメッセージの発信だ。

狩猟で捕獲した鹿を解体して食肉にすることに対して、果たして共感してもらえるのだろうか——。そんな不安を抱きながら、亀山さんは、蛤浜が直面する現状や鹿と共存するための駆除の必要性、そして愛する故郷再生への想いをメッセージに込めた。

ファーストゴールの設定金額は、200万円。鹿解体処理施設建設費の一部に充てる。ネクストゴール（250万円）達成で食肉加工品の開発のための設備の導入、サードゴール（300万円）達成でシェアキッチンを設置することにした。

支援者へのリターンは、サンクスレターや鹿肉の発送、オープン後の施設見学への招待などを用意。こうして2018年10月17日、CFがスタートした。

cafeはまぐり堂を訪れた人たちや亀山さんが教師をしていた時の教え子、CFサイトを通じて活動を知ったというジビエに興味ある人や料理人などからも、支援と応援メッセージが寄せられた。そして、締め切り3日前の11月30日に目標額200万円を達成。最終的には140人から218万円の支援を得ることができた。

クラウドファンディング情報

CF開始 2018/10/17
目標達成日 2018/11/30
CF終了 2018/12/3

目標金額 200万円
45日

調達金額……218万円（109%）
支援者数……140人

CFサービス事業者　Readyfor
CFサイト　https://readyfor.jp/projects/hamagurigibier555

多くの支援者とコミュニケーションを図れることが魅力。

CFの魅力について、「われわれの取り組みに寄り添っていただいた支援者の顔が見えること。さまざまな形でのリターンを通じてお礼ができること」と話す亀山さん。中でも支援者のもとに亀山さんが出向いて講演を行う10万円のリターンに2人の応募があったことは、とてもうれしかったと振り返る。「CFへの挑戦は、単なる資金調達のためだけでなく、牡鹿半島の鹿害の社会的課題や廃棄処分されている鹿の問題をオープンにしたいという目的もありました」。講演会のオファーは、支援していただいた方たちと直接顔を合わせ、牡鹿の実情を伝えることができる絶好の機会にもなる。

また、CFに取り組む際の注意点に「細やかなリターンの準備」をあげた。「支援者に失礼があってはならないと考えます。自身の社会的な信頼にも関わることなので、初めてCFを行おうと考えるなら、熟考して時間をかけて準備することも必要だと思っています」。

解体処理施設の建設計画は、蛤浜の震災復旧工事の遅延の影響もあって滞っていたが、2月末に隣接する女川町の産業用地の手配にこぎつけ再び動き出した。素晴らしい自然に触れることができる故郷が、多くの人でにぎわうことが亀山さんの願いだ。

「鹿の駆除費用には税金が投入されています。これからさらに被害が拡大する懸念は否めません。故郷の未来のために、税金に頼らないシステムを構築し、この地域が生き残るための独自のビジネスモデルをつくっていかなければと思っています」。

事業者情報

一般社団法人 はまのね

所在地　宮城県石巻市桃浦字蛤浜
設　立　2013年
代表理事　亀山 貴一
スタッフ　3人
W E B　https://www.hamaguridou.com/

PICKUP 3

走る楽しさを伝えたい。クラウドファンディングで笑顔いっぱいの故郷に。

山猿選手権実行委員会　［ 福島県 郡山市 ］

福島県中通りの中央部に広がる郡山盆地に、東北３番目の人口を有する中核市・郡山市がある。福島県はスポーツが盛んな地域で、多くのアスリートを輩出してきた。陸上競技のコーチとして、また現役アスリートとして活躍する遠藤清也さんは、東日本大震災後、故郷の郡山市で「走ることの楽しさ」を多くの人に伝えたいと、ランニングイベント開催の資金調達に向けクラウドファンディング（以下、CF）にエントリーする。

「山猿選手権」が伝えたいのは走る楽しさと、帰る故郷のある有難さ。

「山猿選手権」代表の遠藤清也さんは、CFに参加した経緯を次のように話す。「福島県は『駅伝王国ふくしま』と言われるほど、駅伝が盛んな地域です。走りたい人が心から楽しめる場の１つとして、ランニングイベント『山猿選手権』を開催する費用、100万円の調達が目的でした」。

もともとは遠藤さんの呼びかけで、３年ほど前から旧交を温め合ってきたランニングの練習会。高校時代の友人や後輩など、郡山を離れ進学や就職で首都圏に暮らす仲間が、年２回の帰省時に集まる同窓会のようなものだった。そこには、箱根駅伝区間記録保持者や日本高校記録保持者など、トップクラスのアスリートも参加する。「現役も、現役を離れた人もいます。高いレベルの練習ができる上、同郷の仲間と共に走るのは、ほかでは得られない楽しさがありました」。

思いがけなかったのは、回を重ねるごとに増えるギャラリーだった。陸上競技に興味を持つ中学生や高校生、その保護者や市民ランナーもいる。

そこでひらめいたのは「選手権スタイル」での開催だった。自ら走りたい人もギャラリーも、だれもが気軽に参加できる楽しいランニングイベントである。遠藤さんらは、まずは行動してみようと考え、イベントを統括するために「山猿選手権実行委員会」を立ち上げた。2018年１月の初回選手権開催に続き、同年８月には第２回目を企画。初回は参加者・ギャラリーを含め80人程度、２回目では100名を超え、着実にファンを増やしていった。

またイベント終了後には次回開催への問い合わせが続々と入り、実行委員会は３回目開催へ向け動き出した。

代表
遠藤 清也

本格的ランニングイベントを提供したい。開催資金の調達は、CFの公開で。

参加者の声を耳にしたメンバーは、第３回開催は、地域に根付くイベントにしたいという思いが強くなる。一方、遠藤さんは、震災後の福島の子どもたちの肥満率が全国的にも大変高いことを知り、「子どもたちを招待し、故郷を走る楽しさを共有したい」と考えた。しかし、競技場や計測器のレンタル料など、積算すれば100万ほどの経費になる。これまで仲間で持ち寄っていた資金では、はるかに及ばない額だった。

そこで、遠藤さんは、以前から支援者としてCFに参加していた経験から、資金調達の手段としてCF公開を考える。そんな折、偶然にも復興庁支援事業によるCF説明会が、郡山市内で開催されることや国の助成制度があることを知った。

実行委員会がCF支援者に準備したリターンは、「選手直筆サイン色紙」「オリジナルステッカー」「オリジナルTシャツ」「直筆メッセージ入り当日の写真」。ファンにはたまらない人気アスリートによる「パーソナルコーチング」など、委員会メンバーで工夫した品々である。支援者に提示する「目的」は、「たくさんの人に楽しんでもらえる場、走る楽しさを伝えるランニングイベント」の定着と拡大、子どもたちの無料招待などと明確だったため、種々の書類作成や公開までのプロセスで苦労はなかった。

また、イベントメーキングの形も固まっていた。実は遠藤さんには、以前から手本にしたい催しがあった。関東で開催されている市民ランナーの手づくりイベント「＃OTT＃大人のタイムトライアル」である。「イベントの前半は、皆で走る楽しさを前面に出した流れに。後半に進むにつれ、本気モードの走りを伝えるという内容です。トップランナーの走りを参加者に肌で感じてもらえる、そんな雰囲気をイメージし、山猿独自のイベントを提供したいと思いました」と話す。

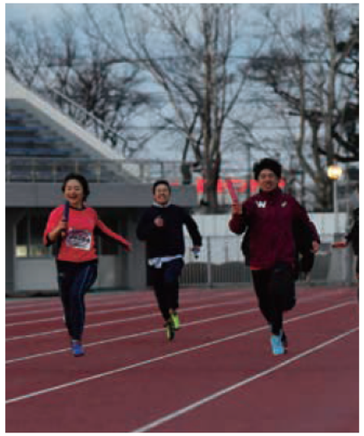
クラウドファンディング情報

CF開始 2018/12/5
目標達成日 2018/12/24
CF終了 2018/12/30

目標金額100万円
19日

調達金額……1,156,000円（116%）
支援者数……135人

CFサービス事業者　CAMPFIRE
CFサイト　https://camp-fire.jp/projects/view/108806



得るものが多かったCF公開は故郷・郡山へ、恩返しの第一歩。

ページのデザインなどに思考錯誤したが、専門家のアドバイスを受け楽しく制作したというCFページ。自ら更新してきた「山猿選手権」のWebページとの住み分けも考えた公開だった。「CFでは『山猿選手権』が目指す、考えや思いを描き、Webページには仲間の楽しそうな様子やイベント報告などを掲載しました」。2018年12月24日は、公開から19日目にして見事に目標額を達成。それから間もなく、年が明けた2019年1月5日、3回目となった山猿選手権は、郡山総合運動場開成山陸上競技場で、150名を超える参加者を集め成功を収めた。

CF公開で得られたものは運営資金の100万円だけでなく、二次的な成果も大きかったと話す遠藤さん。「スポーツ以外の分野で、さまざまな方々と関わりが持てました。機会があってパネラーとして登壇する経験もいただき、僕たちの思いや『山猿選手権』の存在を多くの方々に知っていただいたことも成果でした」。CF支援者の思いも重ねてイベントを継続することで、世代の異なる後輩との連携もでき、山猿選手権を将来につなげる人的要員の確保もできた。

「僕の場合は、CFのリスクは皆無で、メリットが多かったと考えます。むしろ、失敗しても得るものは大きいと判断し公開に踏み切ました」。また、参加メンバーは、支援者の動向やイベント開催での交流を通し、故郷の多くの方々から応援してもらう有難さを実感したという。「『山猿選手権』を継続し、将来的には全国のランナーに郡山市を訪れてもらいたい。被災地福島の交流人口を増やし、故郷の郡山市へ恩返しがしたいと思っています」という遠藤さん。加えて、CFエントリーについて、「もし迷われているのであれば、僕は行動してみた方がいいと思います。失敗しても何かが残ります。熱い思いさえあれば成功も夢ではないと考えます」。

事業者情報

山猿選手権実行委員会

所在地　福島県郡山市大平町後田
設　立　2018年
代　表　遠藤 清也
メンバー　15人
WEB　https://gotkiyoya.wixsite.com/yamazaru/